
夢見る場所

紅屋の仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見る場所

【Nコード】

N6229R

【作者名】

紅屋の仁

【あらすじ】

5年前のあの日、私が夢見た場所を彼女は奪い取った。親友だと思っていた人は美しい花嫁になり、その横には私の婚約者だった人が花婿として立っていた。逃げ出すことしかできなかった私は、長い年月を経てここに帰ってきた。月日が変えてくれたはずのものを見定めるために。ハーレクイン風味。

帰郷（前書き）

突然、思いついた作品です。設定がざっくりですが、気にしないでやって下さい。

帰郷

5年前、惨めでやるせない気持ちで後にした故郷に私は今日戻ってきた。

あの日、涙でにじんで見えた二人の顔が今ははっきり見える。

その上、笑いかけることさえできる。

月日を変えてくれたものを、改めて感じた。

「久しぶりね、リリー。」

美しく着飾ったベラが笑う。

「ええ。久しぶりね、ベラ。」

彼女の顔を見ながら、化粧にかかった時間を考えていた私は、現実
に引き戻された。

目だけで30分はかかってるわね。ひっぱったらどうなるのかしら、
あのやたら長いまつげ。

「あなたのこと、ずっと心配してたのよ？何も言わず出て行ってしま
ったから。」

元婚約者と元親友の結婚式で私に何が言えるのかしらね。
祝福の言葉？冗談でしょう。

「悪かったわ。あの時はいろいろあったから……。」
どうやって駅まで行ったのかさえ覚えていない。

ただ、逃げ出したくてしょうがなかった、ベラと・・・

「連絡してくればよかったのに。」

そう、ニック。あなたから。

私を捨て、ベラを選んだ元婚約者。

少ししわが増えたけど、相変わらず魅力的だ。

「新婚さんを邪魔するような野暮なことしなくなかったのよ。」

あの時、電話したらずっと呪いの言葉を吐いてたわね。留守電にもたつぷり。

女ってこわーい。自分だけ。

「そんなこと気にしなくてよかったのに、ねえダーリン？」

甘えるような声でベラはニックに声をかける。

「ああ。」

対するニックは素っ気ない。

あらやだ倦怠期かしら。

探るようにニックを見れば、彼と目が合った。

何かを訴えるようなニックの視線から私は目をそらした。

目が合うだけで嬉しかった、あの頃の自分はもういない。

ニックと私は幼馴染で、小さい頃から一緒にいた。

ニックは議員の息子で、頭もよく優しかった。学生時代から彼を思い、彼から告白された時は、嬉しくて気を失いそうになった。彼だけを崇め、讚えた。恋していたのだ、盲目的に。

大富豪の息子に相手にされなかったベラが、次の標的としてニックに目をつけるまでは。

ターゲットを定めた彼女の行動は早かった。

私の恋を応援すると言った同じ唇でニックに言い寄り、彼の家族に私より自分の方が家柄的にも彼に合っているとアピールした。ベラは大学教授の娘で、私の両親はベラの家勤めている使用人。

私がニックと婚約することさえ嫌がっていたニックの家族が、どちらを選ぶかなんてわかりきったことだった。

そして、最終的には彼もベラを選んだ。

ベラの家で働いている両親は、私の味方をすることなく私がニックと付き合っていた事実さえなかったことにし、ニックとベラを祝福した。村の人たち全員が、美しい花嫁と花婿を祝福した。みんなニックと私が婚約していたことを知ってたはずなのに。

あの時、逃げ出す以外の選択肢が私にはなかった。

「リリー？」

ベラの声で過去から意識が切り替わる。

「それで、あなたは今なにをしてるの？」
次は尋問ってわけね。

「専業主婦よ。」

その言葉にベラとニックの目が見開く。
私が結婚することに驚いたんでしょね。
ちよっと、その顔写真に残しておきたいわ。
落書きのしがいがありそう。

「結婚したの？」

「ええ。子どももいるわ。」

小さくて可愛い子が2人と、やたら大きい子が1人ね。

「・・・そう、よかったわ。ほら私、あなたが夢見ていた場所を取ってしまったでしょう。」

それでも気にしてたのよ。あなたがずっとニックだけを思いつづけて幸せになれないんじゃないかと思って。」

私の幸せを奪った当事者がいうセリフじゃないわね。

それに、私がニックだけを思い続けて幸せになれないことを望んでいたんでしょう？

自分の今いる場所が、特別だと優越感に浸れるものね。

あら、ニックの顔がゆがんでる。

あなたも、私がずっとあなただけを思っていると考えていたのかしら？

ベラは続ける。

「それで、旦那さんはどんな人なの？」

知りたいでしょうね、でも・・・

「ご想像におまかせするわ。」

というか、説明するのがめんどくさいわ。

「えゝ。教えてくれてもいいじゃない。私たち親友でしょ？」

元ね。あなたと親友なんて、もう二度とごめんだわ。

「そうね・・・それじゃ、当ててみて？」

当てられるものならね。

「そうねえ・・・今リリーが着ているドレスそれなりに高級な物よ

ね・・・。」

さすが、目ざといわね。

「そして、あなたは今、結婚指輪をはめていない。結婚したことを大っぴらにしたいくはないんじゃないかしら。」
その通り。

「わかったわ！あなたは好色でお金持ちな高齢の男性と結婚したのねっ！！」

・・・好色っていうのは、どこから出てきたのかしら？

勢いにのって彼女は続ける。

「老い先短い男性に子どもがほしいと頼まれて、あなたはお金の為にそれを承諾したのよ！きつと！」

どうしても私を不幸でかわいそうな女にしておきたいのね、あなたは。

必死な様子が滑稽にさえ見えた。

今日はここまでにしよう。

「さて、どうかしらね。あら、もうこんな時間。私は眠るわね。おやすみなさい。」

間をおかず話し、素早く席を立つ。

このままじゃ、一晩中ベラに拘束されちゃう。

「あっちよつと！もう明日、絶対教えてもらうからね！」
なるべく早く起きて逃げよう。

でも、少しなら教えてもいいか・・・

「・・・あえて言うなら・・・恐らく私はあなたが夢見た場所にいますわ、ベラ。」

ベラが首をかしげる。

「？何の話？」

これ以上話すことはない。

「おやすみなさい。」

ベラの家のお客室はホテルみたいだった。シャワーを浴び、ベッドに寝転ぶ。

今回の帰郷でベラとニックに会う予定はなかったのに、両親の口からベラに私のことが伝わり、ぜひとも話がしたいとベラが言ったのだ。私の両親はなんの迷いもなく、私にベラに会いに行くよう迫った。

そして、私はここにきた。

二人の顔に自分がどう反応するのか、ちょっと興味があったから。

コンッコンッ

部屋の窓に何か当たる。窓を開け下を見るとニックがいた。

昔、こんな風に何度かニックに呼び出された。懐かしいわね。

静かに部屋を出て階段を降り、裏口から外に出た。元親友の家だから、構造はよく知ってる。

広い庭先でニックを見つけた。

「また、夜の学校にでも忍び込むの？」

あまりにニックが真剣な顔をしているので、からかってみる。

「・・・いや。」

効果なし。おもしろくないわね。

「そう、残念だね。つまらないから、私は寝るわね。」
きびすを返そうとした私の腕を、ニックが掴んだ。

「待ってくれ！君は本当に・・・ベラが言うような男性と結婚したのか？」

「そうだと言ったらどうするの？」

「・・・もし、そうなら僕にできることがあつたら何でも言ってほしい・・・。」

「どうして？」

「・・・僕は心から後悔してるんだ。5年前のことを。
本当に思っていたのは君だったのに、家族のことを思ってたベラを選んってしまった・・・。」

強い力で腕が引かれ、ニックに抱きしめられた。

「でも、信じてほしい。君のことを思わない日はなかった。だから、少しでも君の力になりたいんだ。」

ニックの言葉に私は目を閉じた。

ああ・・・私やっぱり・・・。

帰郷（後書き）

お読み頂きありがとうございます。ベラのセリフを考えるのが一番、楽しかったです（笑）

登場（前書き）

いつだって少し遅れて登場する者。

登場

とても清々しい気分が目が覚めた。

朝食の時間まで、まだ少し余裕がある。

シャワーでも浴びようかと考えていたら、携帯電話が鳴った。表示された相手の名前を見て苦笑する。

「本当にじつとしてられないんだから。」

そう言いながら、彼が私を呼ぶ声のようにけたたましく鳴る物に手をのばした。

「ねえ、リリー。あなた今日も泊まっていっていいでしょう？」

和やかとは程遠い朝食の最中にベラは言った。

ちぎったパンを、口に運ぼうとした手を止める。

「まだまだ話し足りないわ。あなたのご両親にはもう了承してもらったのよ。ねえ、いいでしょう？」

根回しがいいこと。

私が泊まっていくことは、すでに彼女の中では決定事項ね。そして、昨日の尋問の続きがしたいのでしょう。

だけど・・・

「悪いけれど、それは無理だわ。」
さも残念そうに言ってみる。

ベラの顔が少しゆがんだ。

「どうしてなの？ やっぱり昔のことを恨んでいるから？」

「いいえ。」

これは本当。

「ならば、なぜ？」

「実は今日、夫と子どもがこちらに来ることになったの。」

それはもう嵐のように前触れもなく突然にね。

「！！それなら、旦那さんと子どもたちを家に招待するわ！！」

ベラが興奮したように言う。獲物を見つけたサメみたいだわ。実際には見たことないけど。

自分の目で私の夫を見定めたいのね。

「とても嬉しい申し出だけど、ごめんなさい。

夫がね、久しぶりに家族だけでゆつくり過ごしたいと言い出したの。」

本当はベラの家なんか泊まりたくないって言ったんだけど。

「私の家でも、ゆつくりできるのに・・・。」

ニツクの家でもあると思うんだけど。

本人はさっきから存在を消してるけど、大丈夫かしら。

「ええ、私もそう言ったんだけど・・・聞かなくて。」

「それなら、私が説得するわ。何時に駅に着くの？一緒に迎えに行きましょう。」

そうきたか。

男性であれば、ほとんどの人はあなたの言うことを聞くものね。早く会えるし、一石二鳥ね。

でも、そう上手くはいかないわ。

「残念だけど、電車では来ないの。」

自分で運転できないものは嫌いだから。

「じゃ、車で？」

「いいえ。車でもないわ。」

ルールが多すぎるって言うて聞かないのよね。

これまで会話に全く参加していなかったニックもさすがに気になるのか、私を怪訝そうに見てる。

「それじゃ、どうやって……。」

私は、チラリと自宅がある方角の窓を見た。

音はまだしないけれど、姿は見える。

「ほら、あれよ。」

そう言いながら、青空に浮かんでる白い物体を指差した。

「「ジェット機っ!?!」」

ベラとニックの声が重なる。

そう、無駄にでかいあれよ。

夫の移動手段は、家用ジェットと船とそして自転車に限られてる。理由は、ある程度の自由に動けて、なおかつ自分が運転できるから。

全く極端なんだから。

「さて、私は村はずれにある滑走路に迎えに行くけど、あなた達は
どうする？」

啞然として二人に声をかけてみる。

答えなんかわかりきってたけどね。

広いだけの土地に、滑走路がのびている。

まわりにはほとんど何もなく、あるのは滑走路だけ。

上を見上げれば、雲一つない青空と、さっきよりは大分近づいた白い機体。

それと耳に低く響いてくる轟音。

これに慣れるのに、何年かかったことやら。

「信じられない。あなた本当にお金持ちの老人と結婚したのね。」

心なしか悔しげにベラは言う。

老人ってところは外さないのね。

私は答えず、ベラに向かって微笑んだ。

私の人生は、あなたが想像する以上におもしろいことになってるわ、
ベラ。

程なくして、ジェット機は危なげなく着陸した。

そして、耳障りな音を立てて止まった機体から、すぐに飛び出してきた人物。

背が高く、明るめのブラウンの髪を風になびかせ、駆け足でこちらに向かってくる。

顔には満面の笑みと無精ひげ。

また研究所に泊り込んだわね。

あれほど、私がいなくてもちゃんと睡眠をとるように言ったのに。しょうがない人。

「リリー!!」

ベラもニツクも顔見知りなはずなのに、彼女たちには目もくれず、彼は私に駆け寄ってきた。

そして、何のためらいもなく私を抱きしめる。

「リリー、会いたくてたまらなかったよ!!」

そう言いながら、私の顔中にキスしてくる。

ちょ・・・恥ずかしいわ。

手で彼の顔を離そうとすると、今度はその手に口付けてくる。

もうっ! やめなさいと叫びそうになった時・・・

「パパー! ひどいよ!! 僕たちも降ろしてー!!」

と幼い声がジェット機の中から聞こえてきた。

「ああ、忘れてた。」

このバカっ・・・。

彼の腕から何とか逃れ、幼いわが子を迎えに行く。

ジェット機の中を覗き込めば、ふてくされていた顔がほころぶ。

「ママっ!」

よかった・・・。4歳の息子と2歳の娘は元気そうだった。

ジェット機から二人を降ろし、抱きしめる。

「よく来てくれたわね、二人とも。」

「それは、僕に最初に言ってもらいたかったな。」

後ろを振り返れば、今度は夫がふてくされてる。三十路を超えた男性がする顔じゃないわ、それ。

「はいはい、あなたも来てくれてありがとう。」

「心が全くこもってない!!」

大げさに嘆く彼を見ながらため息をつく。すると、抱きしめていた息子が小声で言った。

「パパね、今日の朝ママがいないー!って大暴れしたの。でね、ママを探して部屋をメチャクチャにしたの!」

息子よ……。それは楽しそうに言うことじゃないわ。

メアリー（家政婦）が部屋を見て、絶望しないといいけど……。待っててね、メアリー! 帰ったら、私も一緒にその腐海の森に立ち向かうからね!!

だから、絶対死なないでね!! 潔癖症の家政婦に心からエールを送った。

カッ

その時、響いたベラのハイヒールの音に、私は自分たち家族以外の存在をやっと思ひ出した。

ベラとニックに目をやれば、二人とも信じられないという顔をしている。

まあ、当然よね。

私は彼らの前に立ち、夫と子どもたちを紹介した。

「レオンのことは、二人ともよく知ってるわよね？レオンと私の子どもアランとララよ。」

二人とも、ママとパパの知り合いのベラとニックよ。ご挨拶して？」

「こんにちわー。」

可愛らしく挨拶したアランを無視し、ベラは叫ぶ。

「そんなっ……。あなたレオンと結婚したのっ!？」

「ええ、5年前にね。」

「嘘でしょうっ!！」

本当よ。

あなたが、かつてニックの前に自分の結婚相手にと望んだ大富豪の息子レオンが私の夫。

全く、おかしな運命よね。

登場（後書き）

読んで頂きありがとうございます。2話で終わるはずだったんですが・・・無理でした。次話は、ヒロインとやっと出てきたヒーローとの馴れ初め話です。もう気づかれた方もいらっしゃるかもしれません。せんが、ヒーローちょっと変わった（困った？）人です。

結婚（前書き）

逃げ出したその先に。

結婚

レオンに初めて会ったのは、家を出て、友だちの家に身を寄せていた時だった。

ただ泣いて暮らしていた私に彼は会いに来た。うずくまり、顔を伏せる私に彼は言った。

「お互いの利益のために、僕と結婚しないか？」

レオンのことは知ってた。

私が住んでる村で一番大きい家の主人の息子。

その家の主人は大富豪で、その家は別荘だそうで。

その大富豪は、自分達のためだけに近くに滑走路を作った。

大富豪一家がその家を訪れるのは、1年のうちほんのわずかな間だけ。

その一家が来るたび、ベラが大騒ぎしてたのを覚えてる。

なんでも、地元の名士を呼び、大きなパーティが開かれるらしい。

もちろん、私は行ったことはない。

それでも、うつとりとレオンのことを話すベラの話は何度も聞いていた。

そんな人がなんで？

私はゆっくり顔をあげた。

私の前に立つ男性は、ベラから聞いていた以上にきれいな男性だった。

「僕には、跡継ぎを産んでくれる良識のある女性が必要なんだ。」

レオンの話によると、父が紹介してくる女性に嫌気がさし、感情ではなくあくまで契約として結婚したいらしい。

「僕にとって薬の研究が全てなんだ。」

そのことはベラから聞いてた。

レオンは大富豪の息子に生まれながら、とても有能な薬品開発の研究者として世界に名を馳せている。

華やかな生活には目もくれず、研究に没頭していて、パーティに現れることさえまれらしい。

恋人が出来ても、薬の研究を最優先するから、すぐ別れてしまうのだとベラが言ってた。

「僕は僕の研究の邪魔をしない妻がほしい。」

君の友だちのように、口やかましく付いてくる騒がしいだけの女性はいらない。」

『君の友だち』が誰を指しているかなんて、考えなくてもわかる。この人は知ってるのね・・・私が彼女にされたことを。

「君は君のプライドを取り戻すため、僕を利用すればいい。」

それが今の君に一番、必要な薬だと僕は思う。」

私の乱れた髪をそつと彼は梳いてくれた。

そして、彼は誘いかけるように言った。

「君の花婿が僕だと知った時の彼女の顔を見てみたくないか？」

悪魔のような提案だった。

でも、私は迷うことなくその手を取った。

粉々になった自分のプライドを取り戻すために。

その日から、私は泣くのをやめた。

そう・・・あなたの予想はほとんど当たってたのよ、ベラ。

ただ、老い先短い高齢ってところとお金のためにとってところが違うだけ。

好色っていうのは・・・否定できないわね。
女のカンってすごいわ。

その日のうちに婚姻届を提出し、私たちは結婚した。

式を挙げるかと聞いてくる彼に私はこう言った。

「いいえ。これは契約よ。」

神様の前で誓うものなどない。

憎しみをまとった私に純白のドレスなど着れるわけがない。

そうか・・・と言ったレオンは、また私の髪を撫でてくれた。

緊張しつつ対面したレオンの両親は豪快な人で、一生結婚しない（できない）と思ってた息子の嫁を、想像していた以上に歓迎してくれた。

結婚式はしないと言うと少し残念そうだったが、了承してくれた。
レオンは私の両親にも会いに行こうと言ってくれたが、私は会いたくなかった。

結局、結婚したという手紙を出しただけ。

返事は来なかった。

そして、契約上の結婚生活が始まった。
お互いに干渉せず、ベッドだけを共有する。
そんな生活になる

・・・はずだった。

私がレオンの生活能力のなさにブチ切れるまでは。

レオンの生活能力は、ほとんど皆無だった。

お坊ちゃんとして暮らしてきたから、散らかしたら散らかしたまま放っておいて、片付けは完全に人任せ。どんなに片付けても、彼が一時間そこにいただけで書類の山になる。彼の家の使用人さんたちはほとんどあきらめの境地に達していた。

おまけに、レオンは研究最優先だから、睡眠も食事も好きな時にとる。一度、睡眠をとらなすぎて行き倒れのように廊下に寝ていたこともある。その時は思いきり踏んでやった。

そしてある日、私は彼に言い放った。

「レオン、ちゃんと睡眠と食事をとらないと離婚するわよ！」

レオンは私をにらみつけ言い返す。

「君は僕の研究には口を出さないという契約だったはずだぞ！！
僕の作る薬を待っている人が大勢いるんだ！睡眠や食事なんかどうでもいい！！」

予想していた答えだった。

「このままの生活であなたが体調をくずしたら、できる薬もできなくなるわ！

知ってるのよ、たまに立ちくらみしてること！！」

今度は言い返せないようだった。

「これから、たくさんの人たちを救うためにも、あなたは健康でいなきゃ。」

その日から、私とレオンは朝と夜の食事を一緒にとるようになった。昼食の時も研究所の助手さんに見張ってもらった。

睡眠も当初はレオンをひきずってベッドに連れていっていたが、それに懲りたレオンは自主的にベッドに来るようになった。

今までは立場上、主人に何も言えなかった使用人さんたちも私の味方になってくれた。

ただ、何度言ってもレオンの散らかし癖だけは治らなかった。

というか、レオンに片付けさせるとよけいに散らかる。

しょうがないので、いつもメアリーと一緒に片付けた。

そんな風にレオンの面倒をみるうちに、いつしかベラとニックのことを思いださなくなっていった。

そして、長男アランが生まれた。

子どもが生まれたら、彼は離れていくだろうと思っていたのに、意外にもレオンは赤ん坊に興味を持ったらしく、割と積極的に息子と

関わった。

関わり方がおかしかったけど。

「いいか、アラン。一番効果的な消毒液の作り方はな……。」

この人は0歳児の息子に何を教えてるのかしら。

「やはり消毒液の作り方ぐらいは早いうちからおさえておくべきだろう。」

当然のように言うレオンを、私だけじゃなくアランも「何この人？」という顔で見つめていた。

0歳児に、こんな顔される父親って一体……。

「そう。なら、私はあなたの口をおさえておくわ。」

私の息子がこんなものになってしまう前に！

「僕のリリーは情熱的だな……。」

何を勘違いしたのかキスしてくるレオンを私は止めなかった。

ベッドの中だけだったはずのスキンシップが、こうした日常生活の中で増えていく。

それを、私は嬉しいと感じていた。

だから、結婚した当初は「子どもは一人いれば十分だろう」と言っていたレオンが

「次は女の子がいいな。」

と楽しそうに私に言った時も、特に異議はなかった。

いつのまにか好きになっていた。

わがままな少年のようなレオンのことを。

そして、レオンの希望通り長女ララが生まれ、精神的にも身体的にも安定した私は逃げていた現実と向き合う決意をした。

レオンと子どもたちがいる、幸せな未来を生きるために。

過去は過去として終わらせましょう。

「実家に帰るわ、レオン。」

そう言った私に、「僕なにか悪いことしたかいっ!？」とレオンが大騒ぎしたのは、また別の話。

結婚（後書き）

お読み頂きありがとうございます。活動報告にも書かせて頂きましたが、サブタイトルを変更しました。どうしても話では終わらせられませんでした・・・。計画性がなくて、本当にすみません。内容は変更しておりませんので、ご安心を。

閑話 理由（前書き）

家政婦だけが知ってる。

閑話 理由

皆様、初めまして。

わたくし、レオン様のお宅で家政婦をしております、メアリーと申します。

わたくしは元々レオン様のお父様にお仕えしていたのですが、レオン様が家を出る時に「あいつに一人暮らしなんてさせたら3日で死ぬ。」とご家族全員のお考えの下、わたくしも一緒にすることになったのでございます。

レオン様は幼い頃からそれはそれは優秀なお子様でした。

勉強でも運動でも常に一番で、わたしたちを喜ばせて下さったものです。

ですが、一つのことに集中すると周りが全く見えなくなる所がございました。

それが、レオン様が18歳のとき大問題となったのでございます。

ある日、突然レオン様はご家族全員の前で宣言したのです。

「僕は薬品開発の研究を生涯の仕事にするつもりだ。父さんの跡は継がない」

レオン様のこの言葉には、大変驚かされました。だってそうでございましょう？

お父様の跡を継げば、なに不自由ない生活が約束されているのに、それを捨てるというのですから。

ご家族も大反対されたのですが、レオン様の頑固さはお父様ゆずり。誰が何を言っても、聞き入れず、結局押し通してしまったのです。

そして、家を出たレオン様は薬の研究に文字通り全てを注ぎました。研究所に泊まりこみ、食事もほとんど摂らず、一睡もしない日が何日も続きました。

わたくし共も、とても心配していたのですが、立場上強く言うことができず、誰もレオン様の生活を変えることはできませんでした。

その結果、レオン様の研究は世界に認められ、ご自分の力で富と名声を得たのです。

しかし、レオン様はそれに満足することなく、さらに研究にのめりこんでいきました。

わたくしは、見守ることしかできませんでした。

そんな日々が続いていた、ある日・・・

レオン様がリリー様を、結婚相手として突然連れて来られたのです。

わたくしは、とても驚きました。

レオン様はお母様に似て、とても美しいお顔されていますから、昔から女性には大人気でございました。

ですが、レオン様はあまり女性に興味を持たず、まれにお付き合いしたとしても長く続きませんでした。

そんなレオン様を見て、お父様も「孫の顔を見ることは一生ないかも知れない・・・。」とぼやいておられたほどです。

そんなレオン様が結婚・・・っ！！

お相手のリリー様が、今までレオン様が付き合って来られた目を見張るような美人ではなかったことにも、驚かされました。リリー様

は気取ることも、堅苦しさもなく、わたくし共に挨拶をして下さいました。その時のどこか悲しげな瞳が印象に残りました。

困惑するわたくし共をよそに、リリー様とレオン様は一定の距離を保って生活され始めたのです。

リリー様がレオン様に怒りをぶつけられるまでは・・・。

「レオン、ちゃんと睡眠と食事をとらないと離婚するわよ！」

仁王立ちしながら、言い放つリリー様の姿にわたくし共は慌てました。

止める間もなく、レオン様が言い返します。

「君は僕の研究には口を出さないそういう契約だったはずだぞ！！
僕の作る薬を待っている人が大勢いるんだ！睡眠や食事なんかどうでもいい！！」

言い方は違えど、わたくしも同じようなことを言われたことがございました。

わたくしは、レオン様の強い意志に負け、返す言葉が見つかりませんでした。が、リリー様は・・・

「このままの生活であなたが体調をくずしたら、できる薬もできなくなるわ！」

知ってるのよ、たまに立ちくらみしてること！！」

一歩もひるむことなく、レオン様に立ち向かっていきました。

さすがのレオン様も、真つ当な言い分と自分を心配する言葉に、言い返せないようでした。

そんなレオン様をなぐさめるように優しく、リリー様は言います。

「これから、たくさんの人たちを救うためにも、あなたは健康でいなきゃ。」

それ以降、レオン様とリリー様は一緒に食事をされるようになりました。

研究所に泊まることも少なくなり、お二人の距離はぐっと縮まりました。

誰がなにを言っても自分の考えを変えることがなかったレオン様を、リリー様は変えたのです。

わたくし共も、とまどいを捨てレオン様の奥様としてリリー様と接するようになりました。

そして、長男アラン様が生まれたのです。

わたくし共は大喜びし、誰もがアラン様見たさに仕事の手を止め、リリー様の部屋をのぞきに行きました。リリー様もアラン様から離れず、愛情を注ぎ続けておられました。

その頃です。

レオン様の悪い癖が変わったのは。

レオン様は小さい頃から片付けることが嫌いでした。

リリー様と結婚された後もそこは変わることはなく、きれい好きのわたくしはひそかに落胆していたのでございます。リリー様も何度も注意されたのですが、結局改善することはありませんでした。

しかし、その散らかし方が変わったのです。

レオン様が小さい頃から片付け係だった、わたくしだけが気づいた小さな変化。

レオン様が片付けることが苦手なのは、どれが必要なものでどれが不要なものを決めることができないからでございます。足の踏み場もないほど、散乱した書類や書物はどれもレオン様にとって大事なもののなのです。だから、書類は必ず読めるように表を向き、書物も雑に扱われることは決してなかったのですが・・・

アラン様が生まれてからは、それらの秩序がなくなったのです。書類は表裏バラバラで、書物も折れ曲がっているのです。ただ、散らかっているだけの様子に、わたくしは眉をひそめました。

何故？

その謎は、レオン様のお側で仕事をしていた時に判明しました。

「レオンーーーーっ!!」

ああ、この声は・・・。

レオン様が散らかした部屋を見つけたときのリリー様の声。

レオン様、あなたまた・・・

ため息をつきつつ、ふとレオン様を見れば・・・

レオン様は、とても嬉しそうに微笑んでいらっしやいました。

その笑顔を見て、わたくしは理解しました。

散らかすのは、リリー様に自分を見てもらうためだと。

常のアラン様のお側にいる、リリー様に少しでもこちらを向いても
raithakute、

部屋を散らかしているのだと。

全くなんて不器用な人でしょう。

ちゃんと口で言えがいいのに・・・。

ですが・・・

リリー様に怒られながら、口はへの字になっているのに、目はとても
嬉しそうなレオン様を見て・・・

「ちょっと聞いているの？レオン！」

「聞いているよ・・・。」

こんな日々が続けばいいと、わたくしは思いました。

散らかされた部屋を見て、やっぱり続かないでほしいとすぐ思いなおしましたけどね。

僕を呼んで

僕だけを見て

僕にかまって

僕の側に来て

僕のリリース

閑話 理由（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

確認（前書き）

「登場」の続きになります。大事なことからこそ。

確認

呆然と口を開けて、突っ立ってるベラとニック。

うちの子がそんな顔してたら、口にイチゴとか投げ入れてあげるんだけど。

この二人にそんなことしたら・・・やだ、ちゃっと楽しそうだわ。

「ありえない・・・。」

そうね。

私の顔を見るベラの顔が、憤りからか赤くなっていく。

これは・・・あまり子どもたちに聞かせたくないこと言うかもしれないわね。

「レオン、荷物を降ろしてきて。アランとララもパパを手伝ってあげてくれる？」

「はい！」

いいお返事ね。

レオンは、私の顔を心配そうに見つめる。

私は「大丈夫」と伝えるために少し微笑んだ。

それを見たレオンは

「・・・わかった。」と言って、「何かあったら、すぐ呼ぶんだよ」と言うように軽く私の肩に手を触れて、離れた。

全く心配性なんだから・・・。

レオンと子どもたちが離れるとすぐにベラが声をあげた。

「私があれだけレオンを求めていたことを知っていながら、レオンと結婚するほど、私たちを憎んでたの!？」

「ええ。」

はつきりと答えた。

あまりにあっさり認めた私に二人ともが面食らったような顔をする。

「5年前はね。」

そうすることでしか自分の心が救えないと思うほど、追い詰められていたから。

でも、今は・・・

顔が自然と微笑みに変わる。

「私、とても幸せよ。ベラ。」

あなたたちのおかげでね。

かつて夢見た場所がかすむほど、幸せなの。

「それをあなたたちに伝えたくて、ここに来たのよ。」

それが、私の復讐。

我ながら、なんて意地の悪い。

でも、これでやっと誰も憎まなくてよくなる。

誰かを憎むのも結構しんどいのよね。

「リリー、そろそろ行こう。」

荷物を持ってきたレオンが私に声をかける。

そのとき、もう立ち直ったのかベラがレオンに近寄って言った。

「・・・あのっレオンっ！今日は私の家にお泊りにならない？昔みたいに仲良くしましょうよ！」

色っぽく微笑みながら、誘う。

まあ、まだあきらめていないのね。

ニツクが側にいるのに、よくやるわね。

ある意味、感心するけど相手が悪いわ。

レオンはベラを冷たく睨みながら言った。

「君と仲良くなったことなどないし、僕はリリーと二人きりで過ごしたいんだ。」

4人よ、レオン。

そのために、子どもたちの存在を忘れる癖、何とかならないかしら。

「でもっ！っ！！」

まだ、あきらめないベラをレオンは鋭い一瞥で黙らせ、荷物を持っていない方の手で私を掴んだ。

「行こう、リリー。」

ベラとニツクからさらうように、レオンは私の手をひく。

あら、やだ、ちょっとカッコいいわ。

許可をもらい、今日はお義父さまの別荘をお借りすることになった。4人で過ごすにはあまりある豪華さと広さ。

私たちの家はどちらかといえばシンプルだから、ちよつと落ち着かないわね。

「父さんとは趣味が合わないんだ。」

とレオンが苦笑しながら言った。

住み込みの管理人さんがいるので、食事の準備などもしなくてすんだ。

広い庭で子どもたちと遊び、ゆったりと過ごす。

時々、レオンの問いかけるような視線を感じたけど、それは後でね。

子どもたちを二人で寝かせた後、ソファで一息ついていると、私の表情を窺いながらレオンが話しかけてきた。

「リリー、怒ってるかい？」

怒る？

「何を？」

「君が一人で来たいと言ったのに、来てしまったから。」

怒られるかもとビクつきながら言う姿は、世界に認められた研究者とは思えなくて、思わず微笑んだ。

「いいえ。来てくれて嬉しいわ、レオン。」

レオンを安心させたくて、手を重ねた。
その手をレオンがぎゅっと握る。

「本当かい？それなら、いいんだけど。」

朝、目が覚めたら隣に君がいなくて、僕はパニックになってしまったんだ。部屋を探し回っても見つからなくて、メアリーを問い詰めて、やっと君が帰郷したことを思い出したんだ。」

朝っぱらから災難だったわね、メアリー。

「それで一度は落ち着いたんだけど、今度はどんどん不安になっていったんだ。」

不安？

「君がもう帰って来ないんじゃないかって。」

思っても見なかった言葉と切羽詰ったレオンの表情が胸をうった。

「そう考えだすと、いてもたってもいられなくて来てしまったんだ。」

「

「心配することなかったのに。ちゃんと帰るつもりだったわよ？」

慰めるように、優しく言う。

「本当に？僕は・・・君が僕を捨てて、ニックを選ぶんじゃないかと思ったんだ。それなら、なんとしてでも奪い返さなきゃいけない。だから、僕は・・・「レオン。」」

レオンの言葉をさえぎり、話しかける。

不安に怯えるレオンをこれ以上、見たくない。
レオンと目を合わせ、意を決して私は言った。

「あなたを愛してるわ。」

レオンの目が驚きで見開かれる。
そして、唐突に私を抱きしめた。

「もう一度、言ってくれ。」

懇願するような声だった。

「あなたを愛してるわ、レオン。」

私を抱きしめる力が強くなった。

「あなたに愛してるって言いたくて、私はここに来たのよ。」

ニックに抱きしめられたあの時、私の胸には何の感情も湧いてこなかった。

喜びも憎しみさえも。

こうしてレオンに抱きしめられると、安堵すると同時にどきどきする。

もう終わったのだと確信できた。だから、ニックに言えたのだ。

『私は今のままで、とても幸せよ。さようなら、ニック。』

微笑むことさえできた。上出来な最後だ。

これで、ちゃんとレオンと向き合える。

「でも、言わなくても伝わっていたと思うんだけど？」

言えなかったけど、態度で示していたつもりなんだけど。

「ああ、伝わってた。でも・・・ダメなんだ。君の側を離れると、すぐに不安になってしまう。」

レオンの声は少し震えてた。

それから、しばらくそのまま抱き合っていた。
やっと落ち着いてきたのかレオンがそつと体を離し、私を見つめる。

「僕の思いも伝わっていただろう？」
私の頬を撫ぜながら、レオンが尋ねる。

「ええ、だから逃げていた過去と向き合う決意ができたの。」
私もレオンの頬を両手で包んだ。
レオンが確認するように問いかける。

「本当に僕を愛してる？」

「ええ。」

「神に誓って？」

「誰にだって誓えるわ。」

なんだか、とても幸せな気分だ。笑い出したくなる。

「ふふ・・・いい気分だわ、そう思わない？レオン？」

レオンはそんな私を見つめながら、ささやくように言う。

「ああ・・・最高だよ、リリー。」

視線が重なり、自然に二人の顔が近づき始め、唇が・・・「ママー
っ！！」

触れようとした時、幼いが大きな声が響いた。

声のした方向を見れば、怒った息子がいた。

「ひどいよっ！今日は一緒に寝てくれるってお約束したのにつ！」

「ごめんなさい、アラン。パパとお話があったのよ。すぐに行くわ。」

「・・・あと1センチだったのにつ・・・。」

小さな声でレオンが嘆くように言う。

「しょうがないわよ。」とレオンに微笑みかけ、そつと頬にキスをした。

愛する人たちを心から愛せるという幸せを、私は手に入れたのだ。

確認（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。おそろく次話で完結します。

門出（前書き）

あなたは愛されている。

門出

休養と称してお義父さまの別荘で過ごし始めて3日―
私は家族と平穏な日々を過ごしていた―

表向きはね。

あれからベラが何度も訪問したが、レオンは対ベラ専用の門番を雇い家の中に入れることを頑なに拒んだ。家の管理人さんにも絶対入れないようにと命令して、見ているこっちが「そこまでしなくても」って言いそうになるほどの徹底した拒みようだった。

・・・本当にベラが嫌いなね。

というか、そこまでされてあきらめないベラもすごいわ・・・。

ベラに対しては、そんな風に思うくらいで特に気にしていない。ぶっちゃけてしまえば、もうどうでもいい。

この3日、私の心を乱すのはベラではなく・・・

『リリーへ おはよう。

よく眠っていたので、起こさずに行きます。

帰りは遅くなります。

レオンより』

レオンだ。

私の思いを伝えた夜が明け、目覚めると机の上に置かれていたメモ用紙。

最初は、誰にも起こされずにレオンが私より早く起きたという事実
に心底驚いたが、それが3日続くと、さすがにそんなこといつてら
れない。

レオンは、朝早く起きて、夜私が子どもたちと眠ったあとに帰って
きてるらしい。

ここに来てまでレオンが動くのだから仕事でなにかあったのだろう。

5年前、結婚した直後のようね・・・。

ベッド以外では、お互いに関わらない生活。

でも、それは最初だけで、お互い少しずつ歩み寄っていったのに・
。。

なぜ、また？

・・・私が自分の思いを告げたから・・・？

一度そう思い至ってしまうと、必死で否定するのに、どんどん悪い
方向に考えてしまう。

・・・私の気持ちが入ったから、もう興味なくなっちゃったの・
・・・？

・・・あんなに優しくしてくれたのは嘘だったの？

・・・もう私はいらないの？

子どもたちといると大丈夫なのに、一人になると不安でどうしよう
もなくなる。

・・・レオンのバカ・・・。

そして今日も一人で眠る。

明日は机の上にあのメモがなくて、隣にレオンがいるように心から祈って。

「起きなさい、リリー。」

・・・何でこう人に起こしてもらつと、逆に起きなくなるのかしらね・・・。

私の性格が問題なのかしら・・・。

・・・おまけにこの声は、最もさからいたくなる相手だわ。

「・・・すぐ起きるわよ・・・。

お母さん・・・。」

ん？

お母さんっ！？

飛び起きれば、本当に母がいた。

・・・なんで？

わけがわからず周りを見れば、大きなベッドに豪華な部屋。

うん。ここは間違いなくレオンのお義父さまの家で、私の実家じゃない。

「なんでお母さんがここにいるの？」

戸惑いつつ尋ねる私を完全に無視し、母は無言で私のシーツを剥ぎ取り、私の腕を引っ張る。

「30分あげるから、すみずみまできれいにしなさい。」

と言って私を浴室に投げ入れた。

・・・横暴だわ。そう思いながらも、母の言うとおりにするのは幼い頃からの習慣だからかしらね。
全くなんなのかしら。

ベラの頼み・・・としか考えられないわね。大方、パーティーでも開いてレオンを呼ぶつもりなんでしょう。断れないように母を使って私はそのおまけってところかしらね。

それなら、出来るかぎりきれいにならなくちゃね。

ニヤリと笑って、自分の体を丁寧に磨いていった。

「洗ったわよ、お母さん。」

30分後、私は再び母の前に立った。

「・・・化粧台の前に座りなさい。」

「はい。」

私はさからうことなく母の言葉に従った。

ベラとニックが結婚した時は、両親のことを憎んだ時期もあったけど、それまでは厳しくもちゃんと育ててもらっていたし、レオンと結婚してから仕事を大事に思う気持ちも理解できるようになった。

親の大変さも今、身をもって感じてるしね。

だから、普通に接することができる。

化粧台の前に腰かけた私の髪を母がくしでといていく。
懐かしい。

「久しぶりね、お母さんにこうやって髪をといてもらうの。」

「……。」

また無視ですか。まあ昔から、あまり話さない人だったけど……。
はあ……。

静かな部屋に髪をとく音だけが聞こえる。

目を閉じ、どこか安心するその音を聞いていた時、母が口を開いた。

「……私たちを憎んでいるでしょうね、リリィ。」

母の言葉に驚き、後ろを振り向こうとしたけど……。「動いてはだめ。」という母の一言で止まった。

母は私の髪をときながら続ける。

「いいのよ、憎まれて当然のことを私たちはしたのだから。自分たちの保身のために娘の幸せを売った。」

「お「黙ってお聞き。」」

母の苦しそうな声に耐えられず、止めようとした私を母がさえぎった。

「あなたに少しでもいい暮らしをさせたくて始めた仕事だったのに、いつのまにか仕事が中心になってしまってた……。ベラ様のご家族に、何度も娘にニックをあきらめるようにいえと言われても、そんなこと絶対言わないとお父さんと誓ったのに、最後の最後で仕事

を選んできました。」

そう・・・だったの。

確かに両親からニックと別れなさいと言われたことは一度もない。

あの時まで、二人は私の味方でいてくれたのね・・・。

母はくしを置き、私の髪を結び始めた。

「あなたが、いなくなった後で自分たちのしたことの残酷さに気づいたけど、もうどうしようもなくて必死であなたを捜してるときに、あなたからの手紙が届いたの。この家の主の息子さんと結婚したと。初めはとても信じられなかったわ。でも、この家の管理人さんから聞きだして事実だと知った。あなたを本当に幸せにしてくれる人かどうかこの目で確かめたかったわ。」

「でも、返事さえくれなかったじゃない。」

思わず口をはさんだ。

心のどこかで期待してたから、とてもショックだったのだ。

「・・・出そうとしたわ、何度もね。でも、もしあなたの親が使用人だと知られてしまったら、結婚がダメになるかもしれない。あなたの立場が悪くなるかもしれないって考えると怖くてだせなかった。会いに行こうにも、合わす顔がないしね。」

っ！！

そんな風に思ってたなんて・・・。

髪を結い上げる母の手が暖かさも手伝って・・・涙がでそうになった。

「そんなある日、来てくださったのよ。レオンさんが。」

「レオンが!？」

「ええ。挨拶が遅れたことを謝ってから、あなたを必ず幸せにする
と約束して下さったの。それで、私たちは安心してあなたをまかせ
た。レオンさんは言って下さったわ、『いつかきつと和解できる。
リリーの心が落ち着くまで待っていてほしい。』って。あなた、本
当にいい旦那さん見つけたわね。」

なんで、たまにすごくかつこいいことするのかしら……。
家の中じゃダメ人間のくせにっ！

「子どもができたときも、写真を何枚も送ってくださったわ。お父
さんが大事に保管して、いつも寝る前に二人で見るの。」

母が幸せそうに言う。

お義父さまに送る用にとかって撮ったやつね。

面倒みてるつもりが、ずっと面倒見てもらってたのね。

・・・なんだか、ものすごくレオンに会いたくなってきたわ。

レオンは私をもう十分、大事にしてくれた。

今度は私の番。

この先なにがあっても、あなたを愛していく。

「お母さん。私、幸せよ。だから、もう誰も憎んでないわ。」

髪を結び終わり、化粧に取り掛かる母に笑って言った。

「そんなこと帰ってきたあなたの顔を見て、すぐわかったわ。誰か
に心から愛してもらってる女性の顔だったもの。だから、ベラ様
に見せびらかしに行きなさいと言ったのよ。」

「・・・言葉が足りなくて、意図がわからなかったわ・・・。」

「行きなさい。」と言われたただだったもの。

というか、見せびらかしにつて・・・。

私の性格の悪さは遺伝だったのね！

大きなブラシで私の頬を彩りながら、私の目を見て母は言う。

「リリー、誰よりも幸せになりなさい。私たちはいつでも、そう願っているわ。」

「・・・はい、お母さん。」

どこまでも優しい母の顔。
長く待たせてごめんね。

「・・・さあ、これを着てでかけましょう。」
突然、立ち上がった母が奥の部屋から持ってきたもの。
それは――

とても豪華な車に乗って、たどり着いたのは5年前のあの日、絶望した場所。

すこし寂れたけど、ほとんど変わっていない教会。

5年前のあの日と同じようにたくさんの人が集まって、中には知った顔もいる。

あの日と同じように皆、祝福してる。

でも、5年前とは全然違う。

5年前、美しい花嫁となったベラが立ってた場所に私はいる。
どこまでも白いドレスを身にまとい、

絶望の匂いなんか、全くしない。

あるのは幸福だけ。

車から降りる私の手を握ってくれたのは、父だった。

無言で私の手を取り、自分の腕を持たせる。

そして、ゆっくり進み始めた。

この先で私を待っている、あの人のもとへ。

「ママっ！」

その声のした方を見れば、可愛らしく正装したわが子たちがいた。
ちよつと、誰か写真撮って！

朝から静かだとは思っていたけど、ここにいたのね。

「ママ、パパを怒らないでね……。パパ、どうしてもママをパパ
の花嫁さんにしたかったんだって。」

あきれた……。子どもたちまで巻き込んだのね。

全く……。自然と微笑みが浮かんだ。

少し緊張した様子の子どものたちの先導で、父と進んでいく。

教会の中は、ここにいるはずのない人たちでいっぱいだった。

目が潤んでるメアリーにお忙しいはずのお義父さまにお義母さま。

そして、祝福しているとは思えない顔をしているベラとニック。

……。なんで、来たのかしらね。

そして、バージンロードの先には――

レオンがいた。

ゆっくりとレオンに近づいていく。

そして、父の手を離れる直前・・・「幸せになれ。」と聞こえた。
・・・もう十分幸せなんだけど。

神様の前でレオンと向き合う。

レオンの顔は今まで見たことないくらい幸せそうに微笑んでいた。

その顔に免じて、この3日間私を放って置いたことは許してあげるわ。

溢れでる喜びをレオンに伝えたくて私もゆっくり微笑んだ。

遠い昔、夢見た場所は奪われた。

でも、私はまた夢見てる。

愛する人たちとずっと一緒にいられる未来を

あなたの隣

ここが、私の夢見る場所

— The End —

門出（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。2話で終わるはずだったのに、まさかここまで続くとは……。本当は、もっと細かく5年間のことを書くこうかと思ったんですが、グダグダになりそうだったので、書きたいとこだけ書いてみました（笑）思っていた以上に書きやすい二人なので、また話がいっぱい書きたいと思います。読みたいエピソードとかがありましたら、教えてやって下さいな。最後までお読み頂き本当にありがとうございました！

門出の後（前書き）

ただひたすら甘い。

門出の後

本当に夢のような結婚式だった。

夢じゃないという確証がほしくて、ずっとレオンの手を握ってた。レオンも優しく握り返してくれて、決して離そうとはしなかった。

「全く・・・むちなことをするわ・・・。」

小声でレオンに話しかける。間違いなく、たくさんの人に無理をいったんだろう。

「驚かせて、ごめん・・・。でも、僕は一刻も早く君を僕の花嫁にしたかったんだ。そして、君を苦しめた過去を幸せな記憶で塗りつぶしたかった。君に誰よりも幸せな花嫁になってほしかったから・・・。」

「だから、父と母を呼んだのね・・・。」

「うん。機会さえあれば上手くいくと思ってたし。ただ・・・どちらも君に似て本当に頑固でね・・・説得するのは大変だったよ・・・。」

でしょうね。

父は頑固の塊みたいな人だし、母はどんなに時間をかけても自分の意見を通そうとするし。

「ベラとニックはどうして呼んだの？」

ニックはともかく、ベラの顔はすごいことになってたのに。

「ある意味、彼らは僕らのキューピッドだからさ。ニックが君を選んでいたら僕らは永遠に出会わなかったかもしれない。それに……」

「それに？」

「君はもう僕のものだとニックに見せつけてやりたかった。」

まあ……ニックのこと、そんなに気にしてたなんて……。そこまですなくてもと思う気持ちもある。でも……

「……それじゃ、私もあなたが私のものだってベラに見せつけちゃおうかしら。」

それ以上にレオンの気持ちも理解できる。

私だって、レオンが私のものだと見せつけたい。ベラだけじゃなく世界中の女性に。

自分で言った言葉を私は実践した。レオンの首に両腕をまわし、ぐっと顔を近づける。

するとレオンは私の腰をつかみ、体ごと引き寄せた。

「見せつけるまでもないよ。僕は君しか見てないんだから。……最高にきれいだよ、僕のリリー。」

どこまでも甘いレオンの視線と一緒に、その言葉は私の体の奥底ま

で染みこんでいく。

私は腕に力をいれ、さらにレオンを近づけた。

「素敵な結婚式をありがとう、レオン。私・・・すごく幸せだわ・・・。」

今のこの気持ちを全てレオンに伝えたいのにちゃんと表現できる言葉が見つからなくて、もどかしい。

でも、レオンにはちゃんと伝わっているようだった。

「僕もだよ・・・。」

レオンは私を優しく見返しながら言った。

同じ気持ちであることが嬉しくて、甘えるようにレオンの胸に顔をうずめた。

「この三日間は、あなたがなくて、とても寂しかったわ、レオン。」

「僕だって寂しかったさ。君の声が聞きたくて何度、真夜中に君を起こそうとしたか。」

「起こしてくれてよかったのよ、ただし・・・。」

「優しいキスで、だろう？寝起きの悪い僕の奥さん？」

そう言いながら、レオンは軽いキスをくれた。

「だって、しょうがないでしょう？一番、気持ちよく起きられるんだから。キスの上手な私の旦那さま？」

私も軽くキスを返した。

「僕が上手なのはキスだけかい？リリー。」

レオンの目が妖しくなった。

しまった……。やりすぎたわ……。

この目になったレオンは私の手におえない。

いつだってレオンの好きなようにされてしまう。
ど、どうでしょう……。

「リリー？他にもあるだろう？」

レオンが私の耳に息を吹きかけながら言う。

なんともいえない感覚に体が震えた。

まずい……。これは、まずいわっ！

エロモードに入ったレオンを何とか止めるべく声をあげようとした。
……その時

「お二人さん。そういうことは結婚パーティが終わってからしなさい。」

低くて心地いい声が聞こえた。

この声は……

「お義父さまっ！」

「やあ僕の可愛い娘。どうしようもない息子ですまないね。でも、君たちの晴れ姿をこうして見られたことを心から嬉しく思うよ。」

大富豪である彼の存在感はすさまじい。人を圧倒する力を彼はもっている。

だけど、私や子どもたちにはいつだって優しく接してくれる。そんな彼の笑顔に暖かい気持ちになった。

「父さん、邪魔しないでくれるかな。」

レオンは不満げに言った。

こちらとしては、邪魔してくれて本当にありがとうございます！と言いたかった。

あのままだったら、恥ずかしいことを言わされていたに違いないもの。

「君たちはこれからもこれまでもずっと一緒なんだから、今夜ぐらいは我慢して思いっきり私たちに祝われなさい。リリー、すまないが息子を少し借りるよ。私の仕事仲間に挨拶しなければならなくてね。みんな忙しいのに慌てて来てくれたからね。」

レオンは心から嫌そうな顔をしたが、結局笑顔のお義父さまにひきずられるように連れていかれた。

・・・お義父さま、あなたは素敵です。

そう思いながら、二人の背中を見送っていた私に後ろから声かけられる。

「さぞ、いい気分なんでしょうね。リリー？」

来たわね。

「久しぶりね、ベラ。また会えるとは思ってなかったわ。」

レオンが徹底的に防御してたから。

後ろを振り向けば、挑発的なドレスを着たベラがいた。

・・・間違いなく結婚式に着てくる服じゃないわね、これは。

「レオンが招待してくれたもの。ぜひにつてね。」

レオンが気にしてたのはニックだけだったみたいだけど。

「そう。来てくれて嬉しいわ、ベラ。」

棒読みになるのは、しょうがないわよね。

「あなたもこれから大変ね、リリー。レオンのような人の生活スタイルを受け入れなければならいんだから。」

「？」

意味がわからないわね。

確かに研究バカの生活スタイルに慣れるのは大変だったけど。

「レオンのように魅力的な男性が一人の女性で満足すると思っ
て？
あなたは知らないでしょうけど、権力を持った男性は外に刺激を求
めるものなの。家のことは従順な妻にまかせてね。」

つまりは愛人ってことね。

でも、その定義からレオンは外れてるのよね。

「確かにたまに家に帰って来ないことがあるわね。」

ベラは私の言葉に目を輝かせた。

「ほらね。自分が一番レオンに愛されているなんて思わないことね。」

ベラの顔が優越感でゆがむ。

・・・本当に私の不幸を願ってるのね。

一体どこでこんなふうになってしまったのかしらね。

「そうね。たまにレオンの一番は私じゃなくなるわ。」

ベラはクスクスと笑う。

「かわいそうなりりー。同情してあげるわ。」

傲慢に言い放つベラを見ながら私はゆっくり口を開いた。

「ええ、同情してちょうだい。レオンったらずっと仕事、仕事なのよ！ディナーの約束も何度かすっぱかされたし。一日中そばにいてくれるって言ったのに電話一本で研究所に行っちゃうし。まあ、次の日はずっとそばにいてくれたけど。研究所に泊まりこむのもやめてほしいわ。私が子どもたちと一緒に寝るだけで自分は寂しがるくせに、私は大丈夫だって思ってるのよ。私だって寂しいのに！ちょっと聞いているの、ベラ？こないだだってね・・・」

なおも愚痴という名ののろけを話そうとする私をベラが大声でとめた。

「もういいわっ！ー！」

そして、一瞬悔しそうな顔で私を睨んでから、背を向けて足早に去っていった。

もっと聞いてほしいことがあったのに……。

「知らなかったよ。君がそんなこと思ってたただなんて。」

後ろから愛しい人の声。

振り返る前に抱きしめられる。

「ふん！私はできた妻だもの。わがままなんか言わないわ。」

口ではそんな言いながら、私はレオンの体に自分の背中を押しつけた。

「本当に僕にはもったいないくらいのできた妻だよ、君は。ベラに何か嫌なことを言われてるんじゃないかと心配で慌てて来てみれば、一人で追いついてしまっただから。」

「今の私は無敵なのよ。」

愛する人に心から愛されているから。

「でも一つ訂正があるよ、リリー。僕の一番はいつだって君だ。」

レオンが耳にささやく。

私は体を動かし、レオンと向き合った。

「それを証明して、これから一生かけて。」

レオンは私を強く抱きしめ答えた。

「喜んで。」

その誓いをキスで封じた。

夢はまだまだ終わらないみたい。

門出の後（後書き）

読んで頂きありがとうございました！突然ですが、ネタが浮かんだので『夢見る場所』連載再開しようと思います！内容は活動報告にて。もしよろしければ、引き続き読んでやって下さいませ。

閑話 普段（前書き）

リリーが帰郷した時のレオンの様子をメアリー（家政婦）視点で。
かっこいい彼はどこにもいませんので、ご注意ください。

閑話 普段

皆様、再びお目にかかります。家政婦のメアリーでございます。

先日、本当に突然行われたレオン様とリリー様の結婚式。

皆様さぞ驚かれたことでしょう。

わたくしもレオン様から電話でお聞きしたときは、とても驚きました。

どうなることやらと心配致しましたが、結婚式は大成功！

子どもの頃より成長を影ながら見守らせて頂いていたレオン様の晴れ姿……。

本当に立派になられて！

わたくし思わず泣いてしまいそうになりましたよ……。

リリー様もレオン様の隣でとても幸せそうに微笑んでいらっしやいました。

リリー様のために、並外れた行動力を発揮されたレオン様。

ふふふ、皆様！

レオン様はやる時はやるお方なのですよ！

え？

普段は……？ですか？

そ……それは……。

わたくしの口からはなんとも……。

そうですね……。

わたくしが普段のレオン様のご様子を、こっそりとお話しますので皆様でご判断下さいませ……。

それでは……。

リリー様がご実家に帰られた日の翌朝のことをお話ししよう。

あれは、まだ日が昇る前のことでございました。

仕事を始めようと準備していたわたくしの耳に誰かが暴れているような物音が聞こえたのです。

わたくしは思わず体を強ばらせました。

レオン様はお父様ほどではないですが、社会的に見ればかなり裕福なお方。

そんなレオン様の財産を狙う不届き者が侵入したのでは……と思っただけでございます。

ほうきを両手で握りしめ物音のする方角にむかいました。

たどり着いた先は……レオン様とリリー様の寝室でございました。

少々嫌な予感が致しましたが、この先にいるのは泥棒だと自分に言い聞かせ、わたくしは臨戦態勢に入りました。

あ、言い忘れておりましたが、実はわたくし結構強いのです。

男10人程度なら軽く一人で倒せる自信がございます。主人を守ることもわたくしの務め。

レオン様とご家族に仇なすものは、何人たりとも許しません。

その決意を胸にわたくしは、ほうきを構え、勢いよく部屋に侵入しました。

が、

そこにいたのは寝室にある本棚やクローゼットの中の物を全てひっぱり出して何かを必死で探しているレオン様お一人。

一見すると泥棒に入られたような寝室の惨状……しかし犯人はこ

の家の主。

・・・正直、泥棒のほうがましだと思ってしまったのはここだけの話でございます。

ほうきを振り下ろしたくなる衝動をなんとかこらえ、わたくしはレオン様に近寄り声をおかけしました。

「レオン様、こんな夜明けに一体どうされたのです？」

わたくしの声に一度ビクツとなり、ゆっくりとこちらを振り向いたレオン様。

その目は少し潤んでおりました。

そしてわたくしの姿を認めるなり、レオン様はすごい勢いで立ち上がり、わたくしの両肩をガシッと掴み、耳を塞ぎたくなるような大きな声で

「メアリー、リリーがどこにもいないっ！！」

と叫ばれたのでございます。

レオン様は完全に混乱しておられるようでした。

髪は乱れ、眠れなかったのか目にはくま。

レオン様は落ち着くことなく、部屋中を大股に歩き回りながら叫びます。

「どこを捜してもいないんだっ！」

手当たり次第に家具の中をあさり、ゴミ箱の中まで「リリー??」と覗き込む始末。

・・・はあ。

「もしかして、昨日の昼食でピクルスを残したから出て行ってしま

ったのか!?

違うんだ、リリー! あれには深い訳があるんだ!」

なぜ、リリー様が帰郷されたことはお忘れなのに、どうでもいいことは覚えていらっしやるのでしょうかね。

というか、リリー様はここにいないのに言い訳されても。

深い訳というのも気になります。ただお嫌いなだけだったと記憶しておりますが。

言葉にはせず、わたくしは心の中でつつこみました。

なおも、お部屋を荒らし続けるレオン様。

ここまです。

「リリー様はご実家に帰られたでしょう?」

わたくしの言葉にレオン様の動きがピタツととまり

「実家……。そうだ、リリーは……」

やっと思い出して頂けたようです。

レオン様の体から力が抜けました。

そして、目を閉じ、そつとご自分のこめかみに触れました。

「……。すまなかった、メアリー。真夜中にふと目が覚めると、隣にリリーがいなくて……。それで……」

わかっておりますとも。

これが始めてではないですからね。

前回はリリー様が夜明け前にそつとお子様を見に行かれ、ベッドを離れた時でございました(遠い目)

「そうか……。リリーはいないのか……」

力なくレオン様は歩きだし、ご自分のお部屋へと向かわれました。残ったのは荒れ果てた寝室とまだ日も昇りきっていないのにすでに疲れきったわたくしだけ。

リリー様、なるべく早くお戻り下さい……。

遠くにいらっしゃるリリー様にわたくしは思いをはせました。

それから、しばらく必死でお部屋を掃除していたわたくしに幼い声がかかりました。

振り返れば、アラン様がララ様と手をつないでいらっしゃいました。

「メアリー、パパまた怪獣みたいに暴れたの？」

息子にヒーローではなく、怪獣に例えられる父親って……。しかも、またって……。

父親としてのレオン様の立ち位置が心から心配です。

「お母様がいらっしゃらなくて、少し混乱してしまっただですよ」

ええ、ほんの少しですとも。

「ふん……。そっか」

アラン様はうーんと思えるような顔をされた後、突然

「じゃ、準備しなきゃね！」

と言ってララ様と走りだしました。
準備??

アラン様の行動が気になりつつも、掃除を再開したわたくしの耳に

「メアリー!!」

とわたくしを呼ぶレオン様の叫び声が聞こえました。

あわてて、レオン様のお部屋に駆けつけると、頭を抱えてうずくまるレオン様のお姿がありました。

「一体、どうなさったのです!?!どこか具合でも・・・」

レオン様は駆け寄ったわたくしの肩を再びガシッと掴み

「どうしよう、メアリー!リリーが帰って来なかったら・・・!!」

はい??

「リリーがあいつに再会して・・・。ああ、リリーだめだ!そんなに近づいちゃ!!」

あらぬ方向を見つめながら、声を荒げるレオン様。
どうやら幻まで見え始めた様子です。

「僕を捨てないでくれ、リリー!これからは、ちゃんとピクルスも食べるから!!」

まだ、ピクルスのことが気になっていたんですね。

それでは今度、ちゃんと食べて頂きましょう。

混乱したレオン様を素早く止めることができるのはリリー様お一人だけ。

見守ることしかわたくしにはできません。

すると、なにかを思いつかれたのかレオン様の動きが止まりました。

そして、クローゼットからジャケットを取り出し、鏡の前で着始めました。

きちんとジャケットの形を整えると、今度は髪をセットし、最後にどこから取り出したサングラスをかけ、レオン様は言いました。

「リリーを迎えに行く」

毅然として言い放つそのお姿は映画スターさながらでございました。ええ、この際そこに至るまでの経緯は全て無視いたしましょう。どうか無視してあげてください。

レオン様はお忙しい方なので、常に外出の準備はできております。なので、すぐに出発となりました。

玄関でレオン様をお見送りしようとした、その時・・・

「パパったら、遅いよー」

「おそいー」

わたくしとレオン様が声の方向を見ると、服を着替え、小さなリュックサックを背負ったアラン様とララ様のお姿が庭のベンチにありました。

「僕たちを置いてママの所になんか行かせないもんねー」

「ねー」

ふふ、さすがはレオン様とリリー様のお子！

将来が本当に楽しみです！

完全に準備万端なお子様たちを見て、レオン様は一つため息をおとし

「全く……。いい子にしてるんだぞ」

と仰いました。

わたくしは、その言葉をレオン様に言いたくてたまりませんでした。

そうしてレオン様はリリー様の元へ旅立たれたのです……。

普段のレオン様もこんな感じでございます。

……ええ、あなた様のお気持ちはよくわかりますとも。

なんと表現していいかわからないでしょう？

わたくしも以前からそう思っていたのですが、数年前リリー様がレオン様についてこう仰いました。

「見た目は王子。中身は残念」

レオン様を一番理解されているであろうリリー様のお言葉。

おそらく間違っではないだろうとわたくしは思います。

閑話 普段（後書き）

読んで頂きありがとうございます。レオンはこんな感じの人です。かっこいいレオンよりこっちのレオンの方が書きやすかったりします（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6229r/>

夢見る場所

2011年6月10日09時44分発行